

第4章 近代和歌山の発展



夏目漱石と和歌浦

時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
昭和(戦後)・平成時代	

漱石と和歌山講演

明治時代の文豪、夏目漱石（1867～1916）は、1911（明治44）年8月、和歌浦に2日間滞在し、和歌山市で講演を行ないました。漱石は、『坊っちゃん』『吾輩は猫である』『こころ』などの作品で有名な小説家ですが、社会の在り方や人間の生き方を真摯に探究した思想家としても知られています。この漱石の思想が最もよく語られていると評されるのが、和歌山市で行なわれた「現代日本の開化」という講演です。

夏目漱石は東京大学で英文学を専攻しました（ちなみに同学年に南方熊楠がいましたが、2人の間には交流がありませんでした）。卒業後は東京・松山・熊本で英語の教師をし、1900年から2年間、英国留学をした後、東京大学の講師となります。その後、教職を辞め、東京朝日新聞社に入社し、小説家として多くの作品を新聞に発表しました。

1911年、当時の大阪朝日新聞社が、記者を動員して関西各地で講演会を催しました。漱石も請われて参加し、明石・和歌山・堺の三か所で講演をしました。漱石は明石で講演した後、8月14日の昼過ぎ、当時の和歌浦にあった望海楼という旅館を訪れます。夕方、旅館の裏手にあったエレベーターに乗り、玉津島神社背後の奠供山から和歌浦を一望し、その後、紀三井寺に向かい、高い石段に息を切らしながら夕暮れの和歌浦湾を眺めました。翌日は完成したばかりの新和歌浦遊園地を見学し、東照宮に立ち寄った後、片男波の砂浜で波と遊び、昼過ぎには和歌山市の現在の和歌山中央郵便局付近にあった当時の県議会議事堂（根来寺一乗閣として現存している）で講演を行いました。漱石の和歌浦体験は、理性的に生きようとする人間の苦しみをテーマにした『行人』という小説で、詳細に描かれています。



和歌浦にあったエレベーター

漱石の近代化論

当時は日露戦争に勝利した後で、多くの人々はこれで西洋と同じ「一等国」になったと思い、今後はもっと文明開化（西洋化、近代化）が進み、強い豊かな国になるだろうと考えていました。漱石が講演した前日、同じ会場で著名な教育者による講演会があり、そのような内容が話されていました。しかし漱石は、こうした一般的な考え方に批判的な話をしたのです。日本は明治維新以来、西洋風に文明化し、“開化”することに努めてきたが、それは外部から無理やり強いられたもので、自ら発展の順序をたどった文明化ではない。“外発的”開化であり、やむをえず西洋の“真似”をしたもので、“皮相上滑り”の開化である。したがってこれからは、多くの問題を抱えて苦しむことになる、実に困ったことだ……と話したのです。

会場には約1,200人も聴衆が詰めかけていましたが、漱石の真意を聴衆が十分理解したとは言えない講演でした。しかしその後の日本の社会は、漱石が語った通り、近代化に伴う多くの矛盾に直面することになりました。このことから今では、百年前の和歌山講演は、的を射たすぐれた文明批評であると高く評価されています。

講演終了後は近くの「風月庵」で慰労会が催されますが、台風接近による暴風雨が激しくなり、和歌山市内の旅館（本町3丁目付近にあった富士屋旅館）に泊り、不安な一夜を明かします。この体験も『行人』に興味深く記されています。

ところで漱石は関西での講演を依頼されたとき、ぜひ和歌山を講演先に入れてほしいと返事しました。なぜ和歌山を希望したのか、理由は不明ですが講演会は漱石の希望に沿うように計画され、当初和歌山は最終の講演地に予定されていました。漱石自身もこの和歌山で、自らの思索の結論を思い切って語ろうとしたのでしょう。

和歌山は漱石にとってたいへん重要な場所となったのです。



旧和歌山県議会議事堂（現根来寺一乗閣）